

新たな局面を迎えた山車組の決断は…

# 「自分たちで作ろう」 心一つに男たちが立ち上がった

毎年華やかに繰り広げられる「ふだいまつり」。しかし、国道の運搬上の問題で八戸市からの山車の借り受けが困難になった。「まつりから山車がなくなる」。そんなうわさも流れた。だが、ついに熱い男たちが心一つに立ち上がった。「ならば、自分たちで山車を作ろう」。



8月10日、山車小屋で作業に汗を流す上組の若者たち。色塗りや部品の寸法も山車に合わせながら行うので、作業は思うように進まなかった

## まつりから山車だけは なくしたくない

八戸市からの山車の借り受けに対する道路使用許可については、数年前から問題とされていた。そして今年、ついに道路使用許可が下りなかった。

各山車組では近い将来そうなるであろうことは、頭の中では覚悟していたという。しかし、それが現実となった今年、ついに決断を迫られることになった。

「自分たちで作ろう」「本当に作れるのか」「思いだけでは作れない。金はどうする」。さまざまな意見が

取り交わされた。そんな中「何も立派な山車でなくてもいい。自分たちが精いっぱいやって、10年後に完成したっていいじゃないか。まつりから山車だけはなくしたくない」。そんな熱い思いに山車組の心が一つになっていった。

すでに久慈市や野田村でも同じ問題で数年前から一部の山車組で自作山車が進められていた。久慈市では1台の山車が出来るまでに約9カ月。制作費は600万円だという。村では県の補助金を使い、台車に掛かる経費分170万円を両山車組に補助することにした。

## 台車などの 検討が始まった

山車を作ろうとは言ったものの、事はそう簡単には進まなかった。まず両組で話し合われたのは、台車の大きさだった。

下組の川向正人組頭(44||旭日区)は話す。「みんなで検討した結果、



下組・川向正人組頭

今までどおりの山車の大きさでいいのではないかとの意見が多く、台車は幅3・

6||、長さ10||と、これまで八戸市の山車組から借りていたものと同じ程度の大きさにしました」。



上組・中村信一組頭

長さ8||の台車にした。これは国道の片側を通行できる大きさだ。



7月13日、あんどんなどの色塗りをする上組若連。ひたすら細かい作業が深夜まで続く



8月10日、下組では地区の老人クラブの人たちが装飾品づくりに一役買っていた



8月31日、前夜祭まで後4日。太鼓や飾りの取り付けなど急ピッチで作業を進める上組



8月31日、最後の追い込み。日が暮れてからもカッパを着て雨の中で作業をする下組

## 八戸市に出向き 指導を仰ぐ

下組の台車が完成したのは5月初め。下組では八戸市のこれまでお世話になっていた十六日町組に、山車作りの指導を仰いだ。川向組頭は「装飾品の材料や型の取り方、どんな塗料を使うのかなど、本当にゼロからのスタートだった」と振り返る。

下組副組頭の道上利美さん(47||旭日区)は「時間との戦い。形になっていくにつれ、あれもしたい、これもしたいと仕事が増えていった。『思いがなければここまでできなかった』と熱い思いを語ってくれた。

一方、山車の構想が決まった上組は、今回決めた同じ大きさの山車を制作している八戸市の長横町組を何度も訪れ指導を仰いだ。

「泊まりがけて山車作りを手伝いながら勉強してきました。そこまでやらないとできないと思った」と山車作りの難しさを話す中村組頭。そして「どこまでできるか分からないが、どうせやるなら納得するものを作りたかった」と付け加えた。

## 5カ月に及ぶ 戦いの結晶と誇り

夜7時ごろになると、自分の本業を終えた連中が次々に事務所に集ま

ってくる。建築・建設業、自営業、団体職員など職種はさまざまだ。事務所で山車の装飾品を作る人、山車小屋で作業をする人、それぞれの得意分野で力を発揮する。昔山車作りに携わった地区の人たちも協力した。下組では小学生や中学生も一緒に汗を流した。

台車が出来てから3カ月がたつ8月10日、山車も形になってきた(下組)

